第526号 平成元年 4 月20日発行（毎月 20 日発行）
昭和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

1989 年（平成元年）
4 月 号（No. 526）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目 次

フォスコ・マライーニ写真展……（1）
海外の山……（2）
「マッキンリーからまたも帰らず」
「ヒマラヤン・クラブ名誉会員に三田・西堀両氏を推挙」
「困難な登山をする者の危険と死との関係(1)」
科学研究委・資料委報告……（3）
「戸隠修験道の講演会と探索山行」
東西南北……（5）
「会員通信特集(2)」ほか
自然保護随想……（9）
図書紹介……（10）
「森からの警告」ほか3点
追悼……（11）
「片桐盛之助氏を偲ぶ」
報告……（12）
「奥武蔵日だまり山行」ほか
会務報告・ルーム日誌……（13）
国書受入報告（図書委員会）……（14）
お知らせ……（14）
越後支部・自然保護委・海外委
新入会員・住所変更等……（15）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜 10時～20時
水，金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時～20時

お知らせテープ電話 234 六六五九

# 「フォスコ・マライーニ写真展」

## ――今夏、豊田市で開催――

杉本 誠

この夏、本会の名誉会員フォスコ・マライーニさんの写真展が日本で開かれることになった。昨年の二月から五月にかけ、イタリア国立トリノ山岳博物館で開催された写真展につづくものだが、出展作品二五一点は、トリノ展を六十点余も上回り、一般の写真展と比較しても最大規模の催しとなる。

すでに、マライーニさんが客員教授をつとめる国立国際日本文化研究センターの梅原猛所長を委員長とする「フォスコ・マライーニ写真展実行委員会」が発足し、夏の開催に向けて諸準備が進行中である。同実行委に加わる本会関係者は、谷泰京都大学人文科学研究所所長、風見武秀日本山岳写真協会会長の二氏で、事務局には筆者が入っている。

会期は七月二十九日から八月二十日までの二十三日間、豊田市民文化会館（愛知県豊田市小坂町一二丁目一〇〇番地）を会場にして行ない、初日の二十九日には梅原委員長とマライーニさんの記念講演会を予定している。

写真展の内容は、モノクロ写真、カラー写真、関連資料の三つに大別される。まずモノクロには、南イタリア、チベット、カラコルム、ヒンズークシュの四地域とアイヌが含まれ、年代順に見ていくと、マライーニさんは一九三七年と四八年の二回、チベットに入っており、戦前戦後を通じてのこの写真は貴重である。著書『チベット』も出ている。アイヌも同様で、フィレンツェ大学卒業の翌年一九三八年に北海道大学へ留学してから現在までの蓄積の結果である。アイヌ研究が来日の端緒になっているだけに、日伊文化の交流に尽くすマライーニさんの原点の部分だ。

カラコルムは、いうまでもなく一九五八年にイタリア隊がガッシャーブルムⅣ峰に遠征した時の写真である。マライーニさんはカメラマンとして参加したが、報告書の執筆者にもなり、詳細を極めた記述は牧野文子訳で知られる。ヒンズークシュは、その翌年のこと、マライーニさんは隊長となってサラグラール峰の登頂に成功した。

残る南イタリアは、今度の展覧会では異色の部分である。マライーニさんは一九五一、五二の両年、ナポリからシシリー島にかけて南イタリアの農、漁村地帯を中心に刻明な調査をしていて①自然と歴史②地域と人びと③女性・子供・男性の暮らし、と分類した尨大な作品群は、イタリア国内でも発表されておらず、日本展が初公開となる。

カラーは、日本とイタリアの庭園の比較である。マライーニさんは昨年四月の日文研フォーラムで「庭園に見る東西文明のちがい」を発表していて、最近の研究成果を示す。

以上から分かるように、この写真展は、本年十一月十五日に七十七歳の喜寿を迎えるマライーニさんの全仕事の集大成といえ、カタログもその方針に従って編集を進めている。また会場には、マライーニさんの著書の邦訳を受け持った牧野文子さんの遺品を展示する予定で、原書、訳書、書簡、写真などの関連資料のコーナーを設ける計画である。

今回の豊田展は、昨年五月に筆者が

トリノ展を見て、同館から日本展開催の可能性を打診されたのがきっかけで、来日中のマライーニさんと会って話すうち、終戦前後の一時期、筆者の住む豊田市の寺（市内東広瀬町・広済寺）に敵国人として強制収容されていた事実が分かって、急速に具体化したものだ。

日本展のために新しく制作した二五一点の全作品は、すべて豊田市に寄贈されることになっており、豊田展の後に全国各地を巡回するのは容易である。できる限り多くの人びとに見ていただくためにも、本会会員の協力を得られると何よりありがたいと思っている。

筆者は、出展作品の選定、カタログ原稿の打合せなどで、ことし一月、フィレンツェ市のマライーニさん宅を訪れ、その足でトリノ山岳博物館に回ってアルド・アウディーズィオ館長に会ったが、同館長は日本展開催に全面的な協力を約束するとともに、これを機会に日本との交流を深めたいとの強い要望を出された。

この話は、昨年の訪問の際にも出ていたので、事前に何冊かの山岳写真集を送って検討してもらっていたが、最終的に山田圭一さん（本会会員・筑波大教授）の著書『空撮・世界の名峰』の掲載作品を中心に一三〇点と決ま

# 海外の山

## マッキンリーからまたも帰らず

冬のマッキンリー（六一九四㍍）を目指した山田昇（三九）小松幸三（三五）三枝照雄（三一）の三人がそろって帰らないなどと誰が想像しただろう。八千㍍峰を九座十二回も登った山田をはじめ「現在の日本で考えられる最強チーム」と仲間たちが言ってはばからない、ベテランぞろいだった。二月十七日、登攀開始、二十日昼の交信を最後に音信を絶ち、三月十四日、遺体が発見された。

遭難のことを書くのは、気が重い。山を本気で登っていたら、誰だって死とすれすれの一瞬を体験したことがあるだろう。女神のちょっとした気まぐれがその一瞬を取り返しのつかないものにする時もあるし、逆にどうにか切り抜けさせ、後々の武勇伝の証しの一つとさせる場合もある。

朝、「行ってきます」と四二〇〇㍍のベース・キャンプを出発した山田は、夕方同じキャンプにいた。「あれ、行かなかったの？」と聞くと、「もう行ってきた」と答えた。昨年六月、夏のマッキンリーをスピード登頂した時の模様である。

強さでいうならおそらく日本の登山史上最高ではないかと思われる山田のような登山家の遭難は、自然の前では人間の力などどうしようもないものだ、ということをあらためて教えた。しかし、だから仕方がなかった、とは思わない。

一つには、五年前の植村直己と同じ冬のマッキンリーでの遭難だったことである。あの時も、今回の遭難の一因と指摘されているような「ものすごい風」が吹いた。北緯六三度四分に位置するこの山の冬は、北緯二七度五九分に位置するエベレストなどと較べると、風と寒さにおいては想像を絶するものがあるのではないか。その冬のマッキンリーに山田たちは、やけにあわただしく出かけて行った。

夏の経験と、六千㍍そこそこという高度、そして数々の八千㍍を冬におとしている自信は、戒めていてもつい極北のこの山に油断を持ったかもしれなかった。このことは、シベリアやアラスカを持たない日本人の体質的な弱点と言えるかもしれない。冬、極地の風と寒気は、六千㍍の山を九千㍍に押し上げることを私たちはなかなか実感できない。

山田隊に一日先行して登頂、無事下山したオーストリア隊のように何事もなく済むこともある。が、植村と山田隊の三人の遭難を目のあたりにしてしまった私たちとしては、死の可能性が生の可能性より遙かに高い山として今後冬のマッキンリーを考えるべきだろう。

五大陸最高峰冬期登攀、八千㍍峰十四座登頂を目指した山田とその仲間の悲報は、このコラムで先々月にふれた法政大山岳部のヒマルチュリ春山合宿のキャンプにも、伝えられた。「あせらず、絶対に事故は起こさない」と山からの便りで隊長以下メンバーは書き送ってきたが、雪崩遭難で学生を含む三人の犠牲者を出すという悲痛な結果に終わった。現実は過酷過ぎた。

（江本嘉伸）

り、現在、準備が進んでいる。

会期は今秋十月十日から十一月十五日までで同館の企画展示室が会場となる。この時期、トリノ市では「トリノ・フォトグラフィア'89」（10・10～10・31）が市内全域で開かれていて、本展もその中に含まれる。

ことしはダゲールが写真術を発明して百五十周年に当たり、世界各地で大きな写真展が開かれる。山岳写真の分野から日本でマライーニさん、イタリアで山田さんと、何れも本会会員による写真展が参加する意義は大きい。

なおフォスコ・マライーニ写真展実行委員会事務局は、豊田市西町三丁目六〇番地、豊田市役所文化振興課内（電話〇五六五・三一・一二一二＝内線三七五）に置かれている。

科学研究委員会・資料委員会報告

## 戸隠修験道の講演会と探索山行

●講演会戸隠修験道について

日時　一九八八年七月一日（金）午後六時半～九時

場所　日本山岳会ルーム

講師　武蔵大学教授　宮本袈沙雄氏

〔講演要旨〕八四九年頃、飯縄山で学問行者が祈念し、独鈷を投じたとこ

海外の山

## ヒマラヤン・クラブ名誉会員に三田・西堀両氏を推挙

ヒマラヤン・クラブ日本支部の支部長である大塚博美本会副会長宛に届いた、同会理事会の議事録によると、この度、三田、西堀両氏を含む四名のメンバーが、多年にわたる登山界に対する貢献により、同会の名誉会員として推挙された由である。

他の二名は、チャールス・ハウストン博士とJ・O・Mロバーツ大佐である。勿論日本人としては初めてのことであり、推薦理由として次のように紹介されている。

◆三田幸夫氏

大学時代より北アルプスの槍ケ岳・穂高岳の冬期登山を行ない、一九三九年にはクル地方を旅行。一九五三年にはマナスル登山隊を率い七九五〇㍍に到達した。一九五九年には日本山岳会の副会長に選ばれ、その後一九六八年四月～一九七三年、会長を務めた。また一九六四年より一九八六年の長期間にわたり、ヒマラヤン・クラブ日本支部長（Hon. Local Secretary for Japan）を務められ、在任中数次にわたる日印合同登山隊の成功に助力している。

◆西堀栄三郎氏

京都大学理学部出身、学生時代より、登山の分野でアクティブに行動し、日本アルプスで数多くの記録を残している。一九五二年にマナスル登山の交渉のためネパール入りをしており、一九六三年にはヤルンカン（八五〇五㍍）遠征隊の隊長をつとめた。一九七七年には日本山岳会の会長に選ばれ、一九八一年まで会長をつとめた。この間一九八〇年には、中国側からのチョモルンマ登山隊の総指揮をとられ、史上初の北壁からの登頂に成功している。一方多くの著書やレクチャーを通じ、日本における著名人としても尊敬を集めている。（YN）

## 困難な登山をする者の危険と死との関係(1)

［この記事はスイス山岳会会報「ディ・アルペン」（一九八五年）に載ったものです。（訳は岡沢）　編集］

ある種のためらいを持ちながら、私はこのテーマを取り上げた。しかし私自身、登山における死とか危険の問題を考えることは大変重要なことと思っており、かつて一度、私も山でその限界をかいま見たことがある。

空が青いと同様に死は困難な山登りの一部である。私はそれを統計的な事実というようには考えていない。つまり死は登山者一般にとって取るに足らないものと説明できるし、またそう言うこともできる。つまり「それは単なる二、三の特殊な例であって、私には関係ない」ということだ。登山における死は統計的には千分の幾つといった範囲のもので、小さな比率である。もしそれを問題にするとしても、計算上からみた場合、困難な登山での死はまったく問題とならない。

私がここで先ず取り上げるのは事実としての死ではなく、登山につきもので、その可能性がはっきりしている場合の死についてである。死ぬかもしれないといった自覚は極限の登山においては、非常に重要な心理的要素の一つを形造っている。もし困難な登山から死に対する意識が取り去られたら、それはウイスキーからアルコール

ろ、九頭龍が現われ、戸隠山を示した。行者は現地に出かけて龍を岩戸で封じ、熊野権現を勧請して奥院を建てた。室町時代になると宝光社や中社も建てられ、雨乞の地主神である九頭龍信仰とも相俟って、顕光寺は三千坊と称され、全国的に勢力を広めた。この頃、山伏は洞窟や回峰での修行も行なった。

しかし江戸初期になると実力的戦斗的な山伏は法度となり、儀礼化した僧侶的存在となった。天保の頃は、中央に戸隠権現、左に飯縄権現、右に白山権現の幣を供える神事も見られ、次第に修験宗化し、村の祈禱師として里修験も行なった。明治の廃仏毀釈で戸隠神社に改称、飯縄とも別れて現在に至っている。

一般にわが国の修験道は時代とともに次の四つの型を経過して来たと考えられる。①山籠型、那智の千日修行に見られるように、聖の居る深山や岩窟に籠り、穀断ち、水断ちなどの修行をして霊力を得る。②抖擻型（回峰型）武力集団を目指す僧兵が比叡山や大峰など回峰によって宿を渡り歩き、特殊な力を得た。山伏らしい実践宗教、以上の①と②は中世まで盛に行なわれた。③御師型、江戸に入って山伏集団の戦斗力は解除され純粋な僧侶的存在となり、山を拠点にした御師となった。④里型、民間からの要望にも応える修験宗ともいえるもので、本山派・当山派などに分かれ、村の呪師・占師として里修験を行なった。

戸隠は③④の傾向が強く、求菩提や羽黒は①②的であるといえよう。

**海外の山**

を抜いたかすのようなものが残るだけだろう。そうなれば、登山の分野でこのようにあからさまに死とか臨終について話されることもきっとないだろう。せいぜい危険や、恐怖や、賭けといったことが話され、それもごく控え目に扱われ、そして気をつけることといえば、とどのつまり骨の折れない場所の危険さえすっかり取り除くことになるだろう。

自分に合った困難度の山で限界ぎりぎりの山登りを長年している者は、死というものの体験を、精神的に単純に理解してはいない。熱心なアルピニストなら誰でも、長年の間には死に直接脅かされる場に置かれることがあり、そして奇跡的な幸運を得ると、「また今回もうまくいった！」と記憶にとどめるのである。

かなり熱心な者の場合、こういった死との出会いは、月日の経過とともに度々起こり、数えきれなくなる。困難なアルピニストが死と隣り合わせだということは、このスポーツに関わる者それぞれ、個人的に強い実在感を持っている。もちろん登山におけるこの部分の精神作用を排除することもできるし、僅かばかしそれを残しておこうと試みることもできる。そしてそれをおもてに表わさなくとも、或いはそれについて考えてみようとも、どのようにでもなる。

日常生活の中でも、死が同じように身近になることはよくある。例えば、自動車に乗ったときなど。しかし、とつぜん身近なところに死があるといったこの日常の場合は、山の場合とは根本的に違っている。山では、人間は相手まかせであり、死やその圧力に対し、技術で充分に武装するといった、死の脅しについての専門家にはなりえない。それに、困難な壁において死が近くにあるということは、極めてはっきりとした、重みのある事実なのだ。眼下の絶壁、反抗的に下のほうできらめいている氷、崩れ落ちるセラックス、そして雪崩。日常の生活のなかでいつも覆面し、覆いを掛けている死は、ここでその真顔を現わす。山でわれわれは死というものの概要をつかみ、死はその全貌を見せる。こうして死は身近かに取り組む敵となる。困難な登山をする場合、われわれはできるだけ生死の境界近くにいられるよう技術を磨かねばならない。極限の登山をする者は、生死を分けるナイフリッジでバランスをとる曲芸師だ。はっきりと死が近くにあることを感じ取ると、われわれは命の価値を知り、これに新たな栄光を与える。たいていの人は死が近くにあることを感じると、何の抵抗もなくただ恐怖心に駆り立てられる。彼らは死との距離がかなりあることを確かめると喜ぶ。ここで私は疑問を持つのだが、大勢の熱心な登山者にとって、なぜ重大な死の接近を知ることが命を断たず、命を守る霊薬となるのだろうということだ。こんな場合、これまで何回となく一種の恋愛関係のようなものが死との間にできると言われている。本当だろうか。死に受け入れてもらうため、無意識のうちに死におもねるというのだろうか？　私にはそういったものは何もない。多くの者は確かな自分の命といったものを気遣っている。われわれは危険な立場に留まろうと絶えず能力を働かせているのではない。もし山で死の危険を知らされたら、われわれは全力を尽くして恐ろしい墜落から身を守ろうとする。それはわれわれが死を望んでいない証拠だ。

（以下次号）

**海外の山**

**出席者** 平戸孝夫 杉山正洋 進藤波男 篠崎 仁 鴫原一男 松本欣一 中村あや 岡沢祐吉 久保孝一郎 小松原一郎 石田要久 高橋 詢 高田真哉 石井恵美子 中村純二 千葉重美 松丸秀夫 梅野淑子 井沢信久 浜口欣一 原 謙一 小山内正夫

（中村純二）

**●戸隠探索山行**

七月十六日(土)、講師の二沢久昭氏は長野高専教授、戸隠神社神官、且つ今回の宿舎である二沢旅館の経営者と一人三役のお忙しい身で、二日間密度の濃いお世話をして下さった。二沢旅館は、最近まで正智院と呼ばれた顕光寺戸隠中社の宿坊であった。

午後四時から正智院に伝わる貴重な資料の数々を見せて頂いた。古文書、画像、装具など。中でも戸隠講の方々も中々拝見できないという、廃仏毀釈の手を免れたご神体の仏画は保存状態もよく、まだ顔料も乾いていないかと見紛うほど朱色や緑色もあざやかであった。

午後五時半より二沢氏の講演

「九頭龍信仰について」

〔講演要旨〕 九頭龍とは、九頭一尾の龍で九頭龍大神と呼ばれる戸隠山の地主神であり、本地は弁財天である。奥社脇に九頭龍社がある。

学問行者が九頭龍を石屋に封じて寺を建て戸隠寺としたが、『戸隠山顕光寺流記』には「手力男命が天の岩戸を隠し置くにより戸隠と言ふ。」とも記されている。『能因歌枕』にも、「とがくし」の文字があり、すでに平安中期には中央に知られていた。また『梁塵秘抄』にも「信濃の戸隠」の言葉がある。九頭龍社を含む顕光寺は一一一〇年には比叡山延暦寺の末寺となり、天台系の本山派に属し、戸隠三千坊といわれ隆盛を極めた。

江戸時代には幕府から千石の朱印を与えられ、全国的に見ても規模の大きな寺となったが、明治初年の神仏分離令により、顕光寺は戸隠神社に改称されるとともに、僧も世襲の社家となり、現在は神道一色で仏像、仏画もほとんど残っていない。

七月十七日（日）二班に分かれ、A班は戸隠山へ、B班は戸隠高原の修験探索に出かけた。B班は二沢氏の案内で津村信夫詩碑、狐に乗った烏天狗不動尊の姿をした飯縄大明神の石像、守護不入の碑などを見て中社に出る。小雨の降る越水ケ原を経て、随身門（かつての仁王門）をくぐり、大きい杉木立を進んで奥社に出た。うねった蛇を思わせる戸隠山が眼前である。A班と合流して中社に戻ると、奉納の大神楽がちょうど始まるところであった。

「天の岩戸開き」の伝説をとり入れた古い様式の神楽で、神官たちにまじって無心に舞う二人の童女の姿が印象的であった。

（篠崎 仁）

A班二十名は戸隠奥宮、九頭龍社を経て戸隠山に向かった。霧が去来して何重もの垂直の岩壁が現われては消える様は中々の趣であった。五十間長屋で小休止後、雨となったので百間長屋までで引返すことに決め、奥社に戻ったところB班に合流できた。以後、三々五々、明るい戸隠高原を散策、森林公園、鏡池、宝光社を回ったり、中社のお神楽を拝観したりした。

終りに信濃・岐阜支部からの参加や、赤羽支部長からの地酒の差入れなどに対し感謝致します。

**参加者** 二沢久昭、久保孝一郎、鈴木嶋夫、岡沢祐吉、平沢利夫、丸茂キクエ、日置 邦、丸山冬木、石田要久、石田尭子、篠崎 仁、宮前淑子、中村あや、入谷浩右、大塚玲子、藤井茂雄、国枝武喜、水野美代子、杉山清春、野々口文子、松林のり子、松丸秀夫、中村純二、原 謙一、高田真哉、高橋詢、浜口欣一、梅野淑子、石井恵美子

以上二十九名

（中村純二）

## 会員通信特集（2）

―前月号よりの続き―

北陸の海も青く美しい快晴の昨日は新潟県西端の地、青梅町の親不知中腹の旧国道沿いにあって、日本海を背後に北アルプス最北端の形状を眺めているウェストン像に接しました。

新潟・中村一雄（四三五二）

・

胃の手術をしてから体調不良、あまり山へ行けず残念です。今年は上高地五回、乗鞍岳二回、美ケ原と甲武信のみ。連続して六十六年登山してきて、あと何年登れるか楽しみです。

長野・百瀬一茂（四三五五）

・

先日、御坂を久しぶりで訪れましたが、北側の斜面がスキー場に開発される計画が進んでいると、小屋の人から聞き愕然としました。

神奈川・山本治美（四七二四）

・

昨今はハイキング程度でがまんしています。奈良・米沢 清（四七四六）

・

山と博物館関係の功績ということで「勲五等双光旭日章」が授与されました。山岳会のご支援を感謝しております。　宮城・伊達篤郎（五一五四）

・

今年は五月に四十五年ぶりに鳳凰山に登り、八月はあこがれだった飯豊山に花を訪ねて縦走できました。　静岡・望月計市（五一五七）

・

今夏、久し振りに御岳・剣ケ峰に妻と登りました。正月は三十数年続けて雪の中で過ごしております。　兵庫・田辺昭雄（五二四九）

・

古い山友が相次いで逝くことは淋しい限りであります。私も七十五歳を超えましたが、幸い元気で中級の山登りを続けております。　東京・皆川孝平（五三一八）

・

八月十七日、第十一回目のマッターホルン登頂を果たし、これで海外山岳登頂ピークの延べ数が一〇〇になりました。ヘルンリ小屋から頂上を日帰り往復した中で最高年齢だと、ツェルマットのガイド事務所で誉められ嬉しく思いました。因みに当時七十五歳五ケ月。　福岡・脇坂順一（五三三二）

・

九十一歳になりました。近く自庭に

（会員通信）

## 会員・阪本公一氏より

ヨハネスブルク（南アフリカ）に来て、はや二年近くになりました。三〇〇〇㍍の山があるからスキーの可能性無きにしもあらずと、山スキー一式を日本から持って来ましたが、やはり残念ながらそれだけの積雪はなくスキー道具はクロージットに眠ったままです。

あと二、三年も南アにいたらスキー技術は初心者並みに戻ってしまうのではと心配しています。

雪のほうは冬場の六～八月に三〇〇〇㍍のドラケンスブルグ山脈にたまに降りますが、三、四日で解けてしまう程度で根雪にはまったくなりません。気温だけはマイナス一〇～二〇℃に下がり、強烈な風が吹き乱れるのがドラケンスブルグ山脈の特色です。夏場の十二～二月は雨、ガス、そしてピンポン球のようなヒョウが降り、北アルプスや南アルプスよりも遥かに天候は不安定です。

東西三五〇㌔メートルにわたる三〇〇〇㍍級の岩壁のこのドラケンスブルグは非常に魅力的で、殆ど毎月のようにヨハネスブルグから車で出掛け、すでに十五、六回に及ぶでしょうか。この正月には、ジャイアント・カールス（三三一四㍍）に一週間遊び、一月十九～二十一日にモン・オー・ソース（三二八二㍍）に登ってきました。

登山人口もたいへん少なく、特にドラケンスブルグで他のパーティに会うことは非常に少なく、本当に静かな「私だけの山」を楽しませてくれます。

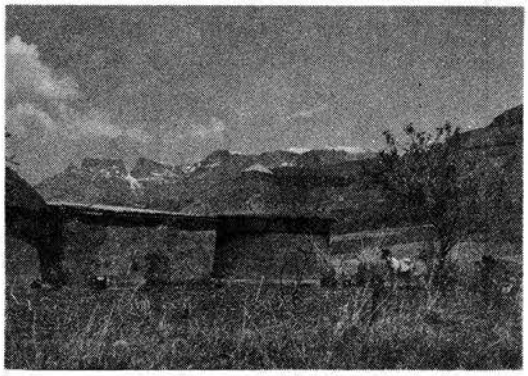
MCAS（南アフリカ山岳会）のトランスタール支部と、ローデポルト・ハイキングクラブに入ってますが、ヨハネスブルグから四～六時間も車で走ってドラケンスブルグで週末を遊び過ごそうという気違いは意外に少なく、どうしても単独行が多いです。

南ア山岳会もフリークライミングの大流行で、近郊の山でG3を登ったとかG4のルートを開拓したといったどうもチマチマした山行が多いようです。日本でもそうだと思いますが、確かにフリークライミングの技術は素晴らしいが、地図も読めない、またドラケンスブルグに入るのに地図もコンパスも持たずに、他人の尻にのこのこと付いて来る山岳会の若者がいるのは驚きです。

山に登ろう、登りたいという夢、そして実際に山に出掛けるまでにどれだけの資料を集め、地図とにらめっこして計画を練るかということも一つの山行行為であり、またそれが楽しみでもあるはずなのですが、どうも私たち年代と今の若い人たちとは違うようです。

日本でも南アでも同じような現象のようです。フリークライミングという一種の競技スポーツが盛んになればなるほど、このような現象は避けられないのかも知れません。

面白いことに当地のハイキングクラブは日本のワンゲルとも異なり、主として低地のハ



ドラケンスブルグ山脈と民家／阪本公一

て紅葉鑑賞の会を催したく考えております。神奈川・中河与一（五四〇〇）

・

南アルプス北部の麓の地域山岳会にあって登山者の安全、特に近年とみに多くなった熟年者の安全登山に気をつかっております。

山梨・二塚謙三（五六六一）

・

北上山地の無名ヤブ山ツブシをやっていましたが、雪で来春まで冬眠です。　岩手・田鎖　寿（五九四〇）

・

ロングタイプのトライアスロンにチャレンジ、丸三年になります。ぼつぼつ足を洗うつもりですが、来年は年代別のランクが四十五歳～四十九歳に上がり、年代別トップになれる可能性があり、何とか狙ってみたいと思っています。静岡・久保田保雄（六二七〇）

・

最近登った山五月石鎚山―筒上山―笹ケ峰―平家平―東赤石。八月石狩岳、ニペソツ岳、ウペペサンケ、駒ケ岳。十一月十二ケ岳―節刀ケ岳。

東京・斉藤敏男（六四五二）

・

今年度から青森県山岳連盟理事長となり少々多忙をきたしております。

青森・下山　壽（六四七一）

・

## 会員通信

イキングのみをやっています。日本では山歩きも、岩登りも「登山」という範ちゅうに入っていますが、当地ではクライミングといえば岩登りのみ、ウォーキングといえば山すそのハイキングと画一的な分けかたをしており、ちょっと面食らいます。京都の北山の山歩きの話をしても、南ア山岳会の若者たちには、もうひとつピンとこないようです。薮山を地図とコンパスを持たせて放り出して、一人で歩かせてみたら、きっと面白い体験を彼らもすると思うのですが。

当地の国立公園の自然保護は、極めて行き届いています。ERAND、EUDU、SPRINGBOK といったシカの種類、サル、バブーン、イーグル始め無数の鳥と、動物たちは豊富です。またドラケンスブルグにもマスが放流されており、RAINBOW、BROWN TROUT が釣れます。もちろん毛バリのみ使用、ミニサイズ二〇㌢以上、一日一人三匹という厳しい規制もありますが、入漁券は一日R.3（一五〇円）と安いですし、なかなか楽しいマス釣りができます。簡単には釣れず、小生も薮々、釣果ゼロで帰ってくるときもありますが、正月には四三㌢と三八㌢の RAINBOW を釣る機会に恵まれました。

JACの方で当地に来られる人があればご紹介下さい。日本の山の話をさかなに酒を汲みかわすのを楽しみにしております。

（会員・阪本公一氏より山本良三会員宛に届いたものを一部割愛して掲載しました。　編集）

♣　♣　♣

・

好日山荘で小西政継さんとお会いできて、クラインマッターホルンを教えて頂き、スイス三大名峰へ行ってきました。愛知・佐藤はまる（六五四一）

・

今年は何十年ぶりかの冬の奥秩父を計画しております。

京都・山路岳夫（六六〇二）

・

こうも地球が息苦しくなるものかと人間が人間のために求めてきた文化の害毒を認識させられる今日この頃です。山の姿はほとんど変わりませんが、弱いものほどいためつけられているようです。

栃木・野沢重治（六六〇六）

・

全国一小さい山陰支部が来年四十周年大会を開きます。ぜひご出席下さい。　鳥取・山岡健志（六六〇八）

・

昨年から野鳥を見始めて一年、現在識別した鳥は一二〇種で、数を増やしているところです。鳥の食する木の実、営巣する樹木等々、自然に興味が広がってゆく毎日です。

兵庫・福原洋一（六六六〇）

・

大阪会場のインターハイのお世話や葛城山ブナ林の保全、協力、調査、岳連の自然観察会、朝日カルチャーセンターの登山教室など、休日なしの連続でした。大阪・山口一良（六七〇〇）

・

白神山地のブナ原生林を守る会の事務局をやっています。運動も一息というところ。皆の力で林道建設も凍結になりそうです。

秋田・奥村清明（六八九五）

・

村に小さい山岳会を作りましたが、いろんな考え方の人がいてまとめるのが大変です。むしろ大きい方がいい面もあるようです。脚が悪くなり、この頃は妻と二人で時間をかけた山行の現状です。福島・加藤博一（七〇〇〇）

・

七十七歳になって、歩く速さ、登る

速さが皆さんの倍くらいかかるようになったので、十㌔メートル、二〇㌔メの所もつい一人で歩くようになってしまいます。現役の皆さんの壮挙はいつもとても楽しみに「山岳」、「山」、新聞等で拝見して喜んでいます。

宮城・岡田幸千生（七〇一一）

・

年間一〇〇日登山を目指して、毎週土、日に山に岩に頑張っています。五十三歳のオジンのやる事ではないかもしれませんが岩も山も好きでこれからも一生懸命登るつもり。

平田恒雄（七〇二〇）

・

山岳会「JAGSEM」を主催。六四～六五ウエストイリアン（西ニューギニア）遠征計画中。過去三度パプアへ。

埼玉・田口憲司（七一一七）

・

関西支部の有志と、毎月の山行が結構忙しく、面白く「変化題」などとミニコミを柱に岐阜、福井、滋賀、富山他の薮山通いの明け暮れです。

大阪・井関　扶（七四三二）

・

阿武隈の山々も四全総計画にて心配です。　福島・宗像清吉（七六五三）

・

大阪天満を起点に、熊野街道、奈良街道、伊勢街道、堺市の自宅を起点に竹内街道、長尾街道、高野街道、紀州街道を分割して歩いています。

大阪・浅香喜丈（七八九六）

・

まだまだ赤ん坊の世話で容易に出かけられませんが、そろそろ活動を始めるべく、今年は当地で行われるスリーデーマーチに一部参加して足ならしをしました。いつでも誰にでも開かれた山岳会であったらいいなと思います。

埼玉・麻生由紀子（七九〇七）

・

今夏は北極圏ノルウェー領のスピッツベルゲン島に調査にでかけ、人のいない山を歩いてきました。

北海道・小野有五（七七三五）

・

初雪の降った日、沼山峠より尾瀬に入りました。その前には飯豊の地蔵山に久しぶりに登りました。

滋賀・片岡濱子（七九〇四）

・

山を眺めることが多くなりました。山は逃げないといわれますが、それは間違いで、登れる時は限られています。若い時に存分に登るべきです。

東京・酒井堅至（八〇八〇）

・

今年は『温泉ハイキング』なる本を書くために温泉と軽いウォークを楽しんでいるうちに終わってしまいそうです。東京・伊佐九三四郎（八〇九二）

・

九月十一日に父藤島玄が死亡。自分ながら父親に甘えていたものと思っているのでとても悲しいです。年齢的には不足はないのですが、まだまだ元気でいて欲しかった。それと同時に山がとても遠くに感じる様になりました。

千葉・滝口豊子（八三四三）

・

ブナ林の伐採が全国的な問題となっている。さらに強い取り組み、働きかけが必要。

高知・広野孝男（八三七四）

・

今年三月に定年退職し少し暇ができましたので、県内の一〇〇〇㍍以上の山で登っていない山を順次登るべく努力しています。

愛媛・増岡栄一（八四六二）

・

雌阿寒岳の山麓で暖帯のシダ植物ミズスギがみつかりました。イソツツジやアカエゾマツ林に囲まれた水蒸気噴出孔の周囲にグリーンのマットを敷いたように群生していました。北海道ではここと川湯の硫黄山のみの隔離分布になります。亜寒帯の暖帯植物の分布は、山の成因と同時に興味はつきません。　北海道・新庄久志（八四九二）

・

全国の三国山を歩いて北海道だけになりました。

大阪・百田治人（八七一八）

・

今年は初雪が早く、ここ会津盆地から純白に輝く飯豊連峰、磐梯山を望むことができます。八～九月にインド・ヒマラヤ（ガンゴトリエリア）へ遠征計画中。福島・大竹幹衛（八八三三）

・

十月会津へ行きました。七ケ岳、荒海山へ登りました。野岩鉄道はわれわれ名古屋の登山者にも会津の山を身近なものとしました。反面、これからの自然破壊が目に見えるようでおそろしく感じました。

愛知・深谷　泰（八八八三）

・

年と共に山が楽しくなりました。しかし酒の量が少々減りました。

新潟・斉藤省吾（八九〇四）

・

近畿のヤブ山を休日にはせっせと歩

## 今年もさんけんで会いましょう

いています。

大阪・村木康義（八九三九）

・

二人の孫を持つ身になりました。昨年暮れから本年正月は立科山天狗岳の単独縦走、夏は甲斐駒地蔵岳の単独縦走等。大学時代の友から、孫ができても山登りをする奴は本当の馬鹿だといわれています。

埼玉・戸谷　翠（九〇三六）

・

立山連峰に通ずる登山道を地図を頼りに歩きました。ひどい荒れ方に驚きました。何とかならないものか。

東京・宮本信一（九〇九一）

・

『マンモスとの山旅』（高橋由美子著、高橋文夫写真、岳書房）という本を出版しました。

京都・高橋文夫（九一三三）

・

今年も八甲田山、南アルプスを個人的に登っております。

東京・百瀬健彦（九二五四）

・

今年も家族で北アルプスへ出掛け、表銀座コースを縦走後山研へ立ち寄りました。遠くにいる者を親しく迎えて下さるこのような山荘があるのは何より心強い支えです。

熊本・川端浩文（九三二八）

・

南アルプスを歴訪するのが今年の計画でしたが、仕事持ちの身上とシーズン中の長雨で、五月初めの鳳凰が唯一の山行でした。木暮祭に参加して知己を得たこと、三十年振りの金山・有井館の人々がなつかしかったこと。

東京・藤川三郎（九四六四）

・

集会山行では多くの方においでいただき、ありがとうございました。

群馬・平野紀子（九五六八）

（以下次号）

〔自然保護随想〕

## 廃墟のロマン

チェルノブイリの原子力発電所事故のとき『日本とは方式も違うし、安全技術は日本が世界のトップ』という話しを、何となく信じていたが、最近の福島第二原発の事故の話を聞くと、日本の原発安全神話も怪しくなってきたように思う。

福島の事故はポンプが壊れて、炉内に金属片が大量に散らばったというが、振動計の針が振り切れて警報ブザーがなったのに、非常停止もされず、長時間にわたって稼動が続けられた―というニュースも流されている。これでは反対運動は、いよいよ強くなるし、新しい原発建設は難しいように思う。

すでにヨーロッパは、フランスを例外として縮少から廃止の方向にむかっており、アメリカもスリーマイル島の事故以来、慎重になり消極的、縮少の方向にあるという。環境問題への人々の関心の高まりとともに、放射性廃棄物の処理が、最近のフロンガス以上に厄介な問題となりそうな予感もある。

身近な問題として、電力需要の増大に、どのように対処するのかという問題は、平凡だが省エネ技術の向上で解決する以外にはないように思う。最近の大型テレビの電力消費量は二十年前の十六インチカラーテレビの三分の一だ。もう省エネ技術は限界だとも思えない。逆説的だが『石油など化石燃料の埋蔵量に限りがある』という心配が、技術革新のテンポを早めると考えてもよいのではないか…。

いま一バーレル十八ドル前後の石油が、今世紀中に四十ドル以上にあがる―という予測を読んだ。石油価格の上昇が発電コストの上昇につながり、省エネ技術の向上に拍車をかけることになろう。いまは経済的に合わないという太陽電池のソーラーハウスや、風力発電が相対的に有利になってくるし、これらの発電効率があがれば、経済性も飛躍的にあがる。今世紀中にソーラハウスの時代が来るというのも、夢ではない。

九電力の使命も変化しよう。原子力や火力発電所、日本を縦断してはりめぐらされている高圧線の鉄塔も必要がなくなる。エジプトやギリシャ、ローマ、オリエントやシルクロード、インカの遺跡は、人々のロマンをかきたててきたが、廃虚と化した発電所のコンクリートや鉄塔の残骸が、人々のロマンをかきたてる存在となるとは考えられない。

（関塚　貞亨）

次代に残そう美しい山と渓

## 「森からの警告」

畑　正憲／C・W・ニコル　対談集

片や北海道・「動物王国」の宗主、いま一方は長野県・黒姫に住んで日本の自然破壊に怒りをぶつける外国人。二人のナチュラリストが、時間の制限なしにくつろいで語り合ったらどうなるか。

この対談は、昭和六十二年六月に中標津町の畑宅において、二泊三日をかけて行なわれたもの。その二カ月前に、知床の国有林は全国からの反対の声をよそに強行伐採されていた。話は当然、日本の林野行政への批難から始まった。

日本に残る最後の原生林を、老齢過熟木伐採による森の若がえりだとまやかしの理論で押し切り、わずか十一日間の野生鳥獣調査で伐採OKの結論を出したのは、まさに犯罪行為だと怒りをぶつける二人。

珊瑚礁埋立てが争点になっている新石垣空港建設問題では「沖縄は日本に返すべきじゃなかった」と極言し、「儲けた金を自然破壊のために使う日本の経済体質」を糾弾するニコル。フィールドワークの積み重ねによって得たものこそが真実であり、「死んでいったいっぱいの生き物のためにも、やっぱりがんばらないと」という畑。最後にニコルは、もしも自分が環境庁長官になったとしたら「ストレスで死ぬであろう。さもなくば、林野庁長官に決闘を申し込むであろう」と結んでいる。

それぞれの個性が行間にひびきあい、楽しく読み進むうちに、自然に対する危機感が身に迫ってくる。巻末に、編者である加藤則芳の知床伐採現場からの報告が収められている。

一九八八年五月、CBS・ソニー出版刊、二二一頁、定価一五〇〇円

（近藤　緑）

## チベットの山

カイラス山とインド大河の源流を探る　C・アレン著　宮持　優訳

旧く昔から、支那と印度の間の何処かに地球の中心、宇宙の軸となる聖なる山があって、その頂きから一本の川が流れ出て一つの湖に入り、そこで分かれて亜細亜の四つの大河（インダス、サトレジ、ガンジス、ブラマプトラ）になるという。南に流れ出る大河の源は、屏風のようにそそりたつヒマラヤの大障壁を潜り抜け、牝牛の口の形をした岩から流れ出るといった神話や伝説に色どられた謎の場所でもあった。

その聖なる山はあらゆる山の中で最も神聖なる山であり、何百何千万人ものヒンズー教徒や、仏教徒、ジャイナ教徒たちから神々の住む家として崇敬されていた。この聖域こそチベットに聳えるカイラス山とマナサロワル湖である。

本書は十七世紀以降、地球の謎、地図の空白部をめざしたキリスト教伝導師、東インド会社の傭兵、軍人、パンディット（測量スパイ）、狩人、探険家らによる、インダス源流いわゆるガルワール探査、マナサロワル湖とカイラス山、ヒマラヤの大障壁を断ち割ったツァンポ大峡谷、チベット高原のブラマプトラ川の水源などの探険行を時代を追って概説している。

インド測量局長の孫にあたる英国人が著した本書の中で、河口慧海師のチベット潜入行も大きく扱かわれており、慧海がいかに優れた探求者であったかが想われる。

またスウェン・ヘディンの業績とヘディンの主張に対するロングスタッフら王立地理学会員の反論にもふれており、何故トランス・ヒマラヤ山脈が消滅してしまったのか、ヘディンの探険紀行全集にない一面を見せられ、興味がひかれる。

チベットの登山が解禁されて十数年、地図の空白部はなくなってしまった。わずか八〇年前までは、そこはまったくの空白部であったにちがいない。

一九八八年七月、未来社刊、二七四頁、定価一八〇〇円

（高橋善数）

## 日本の山登り記

木南金太郎著

この本がでたのは昭和六十三年（一九八八）五月。著者の略歴を見ると明治四十二年（一九〇九）の生まれとあるから、八十歳に近い折の上梓ということになる。序章の「山に憧れる」によると著者が山登りを始めたのは小学生の高等科一年という。以来、一時の中断はあるにせよ六十数年にわたる山登りの紀行がぎっしりとつめこまれているのが本書であり、B6判とやや小型ながら四百数十ページにもなる部厚いものに仕上っている。

書名は一見、日本の登山史を思わせ

るが、けっしてそうではない。全国の山々を広く登っての、つまり日本の山の紀行文集なのである。長い教員歴の間、〝利尻山より宮ノ浦岳まで〟と副題にあるように実に多くの山に登り、その一つ一つがていねいな文章によって描かれている。

「…私は大正時代に基礎教育を受けた者ですから、その当時、頭に入った漢字や仮名づかいで書きました。殊に、新仮名づかい、音韻仮名づかいは納得がゆかないので、旧仮名づかいにしました。と「まえがき」に書く著者は、日本の山々を楽しみ、かつ深く愛しながらも、年々、いらざる車道が延びていく現状をおおいにうれいている。著者は本会会員で、入会は一九七九年。

一九八八年五月、茗渓堂刊、四六五頁、定価一五〇〇円

（横山厚夫）

## 森林を蘇らせた日本人

牧野和春著

緑や森林が様々な視点から論じられ、地球規模での自然破壊が警告されている。その中にあって、本書は、著者が歴史の森に分け入って、父祖の足跡を実証してみようと、現地を自分の目で見、そして人に会って記述した、謂わば足で書いた点に特色がある。

上杉鷹山、野中兼山や熊沢蕃山とおなじみの登場もあるが、地域の困難な諸問題と取組んだ野呂理左衛門、古橋源六郎暉皃、船津伝次平、蔡温、亀井慈矩…といった一般にはあまり知られていない群像にスポットを当てた点で、歴史好きの人々にも興味が持たれよう。

これらの人々が、防風、防雪、砂防、治山、治水、水源涵養、新田開発、林業、殖産振興、地域の共存共栄等にその志を殉じ、波瀾に富んだ生涯が紹介されている。

当然そこには当時の為政者の施策、地域住民とのかかわり合い、飢饉対策、林政方法書、百年計画の植樹法、村落の共有林構想、果樹の奨励、桧・

追悼

## 片桐盛之助氏を偲ぶ

中村純一

テントの片桐の二代目当主、片桐盛之助氏は老衰のため、去る二月一一日の朝亡くなられた。前日は昼もお美味しく食事をされ、美枝子夫人に明日は天ぷらそばを食べたいと話されるほど、元気だった由である。時に九二歳。最後まで頑固に自己を貫いた大往生であった。

宝寿院釈徳盛は一代目貞盛氏の長男として、明治三〇年三月三日、築地鉄砲町の帆布屋に生れ、神田の中学も卒業したインテリで、若い頃は自作の帆をつけたヨットで隅田川を乗りまわし、また山に出かけるなど、結構遊び気もあったようだ。これが後に、自分で納得するまで製品を改良し続けたり、気に入らぬものは作らなかったりという典型的な職人気質につながることにもなった。明治四三年に明石町へ、関東大震災後は新富町へ移ったが、先代が昭和三年に亡くなると愈々本格的なキスリングの製作が始った。原型はグリンデルヴァルトの馬具職人キスリングが作ったもので、松方三郎が昭和四年日本に持ち帰り、佐藤久一朗が片桐に試作させた話は有名であるが、原型が日本人や日本の登山に合わなかったのは当然である。当時、登山者の溜り場のようになっていた店先で、様々の意見が交され、改良に改良を重ねた末、重量にも耐え、長持ちする冬山用片桐のキスリングは完成品へと近づいて行った。

昭和四年神田九段下に、昭和二五年からは湯島天神下に移ったが、その間立教大ナンダコット用のカマボコ型テントや、京大大興安嶺用のアークチックテントも作られた。これらは製品の使われる場所や環境につき何度も話合い、検討の上、作り上げられた我国第一号のオリジナルである。

昭和四〇年、三代目理一郎氏に店を任せ、千石の自宅に退いた後も、居間の一隅に使い馴れたミシンなどを置き、気に入った山の小物を楽しんで作って居られた姿が思い出される。合間には佐伯文蔵氏と一服剣に遊んだりの日々であった。常に利益など度外視して、納得のゆく山道具を作り、面倒な綻びも丁寧に修理して呉れた、誇り高き職人の逝去に対し、心から哀悼の意を表し度く思う。

日本山岳会の会員番号は一一二六番であり、盛之助氏が何十年に亘って皮の手縫に使用して来られた、イギリス製生なめしのパームと丈夫な三角針を、今回資料委員会に寄贈して頂いた。併記して感謝の意を表する次第である。

杉・楮・桑等指定樹種の保護育成等様々な展開がある。自然と闘い、自然を利用して苦難の中に生活の糧を求めんとするこれら先人の幾多の尊い教訓がある。

著者はジャーナリストの出身で、著書に巨木をテーマとして数冊あるが、本書にも「山の神」について先人達の生き方を眺めて紙面をさいている。日本人の心の奥底には巨木、巨岩、天変地異等と「神」は不可分なのであろうか。

わが国の森林の様相は、寺社等の大型建造物が自然林を減退させ、新田開発が山野の荒廃をもたらし、人工林が時代の変遷の中で植造林と乱伐・荒廃を繰返して現代に至っている。緑や森林の危機が叫ばれている今、私達は何をなすべきなのであろうか。

著者は最後にこう述べている。

「大事なのは〝対策〟ではなくて〝改革〟ではあるまいか。〝対策〟は条令や法案の手直しに行きつくのであろうが、〝改革〟は『初めに哲学ありき』でなくてはほるまい。理念をどこにおくのか。従来の林野行政の枠を超える課題となるであろう。

こうした状況下に〝先人〟の〝生きざま〟を、もう一度かみしめ、あのすさまじい〝生きざま〟を、もう一度凝視してみたい。」

一九八八年六月、日本放送出版協会刊、二一〇頁、定価七五〇円

（麦倉　啓）

**報告**

## 奥武蔵日だまり山行

自然保護委員会

二月十九日、八時五〇分、西武秩父線武蔵横手駅に集合したのは三十五人であった（秋田支部長も遠路参加された）。今日の山行は、古い峠道と山村、開発されたゴルフ場、山が失くなる大分譲地、古いものと新しいもの。参加者に何かを感じ取って欲しい、というねらいがあった。

木馬道を通ってカマド山に登り、久須美坂への稜線に出る。ゴルフ場を見下ろす小平地で小休止する。芝育成のため農地の四倍も農薬を散布し水汚染の原因になっていること、広い土地を、少数の人が有料で使うこと、その場所から見える山々、などについて語り合う。

一たんバス道に出て、小さな榎坂峠を越える。豚舎のある刈生集落から、赤根ケ峠へ登る。段になった田の脇の峠道は、昔の自然がそのまま残っている。

十二時～十四時二十分と赤根ケ峠で昼食休憩する。川崎精雄氏、望月達夫氏など六人が通過される。

畑トンネル北側で車道に出て、途切れた尾根を登りなおして、朝日山へ。大岳などの好展望地なのだが、春のような天候の今日は見えない。

桜の美しかった尾根、不動の滝の落ちる沢を、跡形なく削り取って造成された、大分譲地のへりを歩いて、祠のあるピークへ。ここで係は、踏み跡程度の近道をして、自然保護精神に反する、と参加者に叱られた。

大河原で車道に出て裏道を飯能駅に歩く。十五時、東飯能組と分かれて、解散した。

ティーバックを投げ棄てる人、係のゴミ袋に自分のゴミを入れる人、自分の持って来たゴミは、自分で持ち帰ろう。

**参加者**　岡田光行、松下　肇、原　謙一、丸茂キクエ、里見清子、祖父川精治、冨田郁夫、山口俊輔、片岡　博、小川　隆、荒木正弘、長嶋正浩、百瀬健彦・清子、川上光久、平戸孝夫、石田喜八・積子、横溝修一、橋本雅子、上野和之・静子、乾能尚、水村通子、宮入保徳・三津恵、岡村美邦、足立孝也、小倉厚、近藤　緑、前田美千彦、西山俊恵、遠藤光男、関塚貞亨、山口悠紀子　計三十五名

（山口悠紀子）

## 自然観察山行

―宮ケ瀬ビジターセンターと春木山―

自然保護委員会

三月五日、雨のビジターセンターに九時三十分着。自然保護協会解説員の森氏に、センター内を案内して貰い、説明を受ける。

## アイス・ウォーク一九八九年北極探険隊事務局からの礼状

海外委員会

ロバート・スワンを隊長とする表記探険に本会も協賛することになり、その礼状と計画の概要が同事務局より送られてきましたので次に掲載します。

拝啓、十二月十七日付、貴翰拝受致しました。ロバート・スワンにかかる名誉を与えて戴きました御厚情に対し、日本山岳会会長並に会員諸氏に深甚なる感謝を申し

## 北極探険隊事務局からの礼状

上げます。私達は、アイス・ウォークによる一九八九年北極探険隊が、日本山岳会の協賛を得ましたことに、多大な喜こびと誇りを感じるものであります。

新年の御挨拶と共に、会長並びに会員諸氏の御健康をお祈り致します。

敬具

一九八九年一月十日

英国サレー州ファーナム、ウエスト街ウィーヴァーズ・ヤード、六―七番地

アイス・ウォーク一九八九年北極探険隊事務局国際事務局長

ウィルフレッド・グレンヴィル―グレー

隊長、ロバート・スワン

＊

### アイス・ウォーク一九八九年北極探険隊の概要

ロバート・スワンは、一九八六年南極徒歩探険以来、極地のオゾン層破壊について、多大な関心を向け、今回も北極徒歩探険を通じて、極地の汚染状況を調査し、この結果を踏まえて、世界中の政治及び経済の指導者に対して極地オゾン層の破壊をこれ以上広げないように訴えることを目的としている。そのために国際隊を組織し、カナダ、ノースウエスト準州レゾリュートにベースキャンプを置き、世界の子供達（或いは学生）を約二十名招待し、参加した子供達（或いは学生）も、キャンプの仕事や科学調査を補助するほか、そり、イグルーの建設、サバイバルの訓練をし、極地での国際的な共同生活、現地の人々との交流をし、それぞれの国に戻って、報告、アピールをする。

今回の探険隊は、直線にして七七四キロメートル実質、約九八〇キロメートルの距離を、約一一二キログラムの生活必需品を積みこんだそりを、全く「自分達の力」だけで引く極めて困難な踏破行になる。また、三月に出発、五月五日の到達日まで、約五十日、氷の解け始める前の限られた時間内に野生の北極熊の脅威にさらされながら行動しなければならない。

隊長、ロバート・スワン（英）三二歳、王立地理学協会会員、英国山岳会会員、日本山岳会会員（一〇二五〇番）一九八六年一月十一日、七十日間、自力でそりを引き、世界初の徒歩による南極点到達に成功、この業績によって、英国女王から「極点メダル」、ニューヨークの探険家クラブから「功績賞」を受ける。

副隊長、ルパート・サマーソン（英）三五歳、地質学者、一九七九、八三年の二回、英国南極調査隊参加、英国海軍予備役大佐、北極担当指導官。

隊員、大西　宏（日）二六歳、明治大学山岳部OB、日本山岳会員（一〇一三一番）一九八七年、ラカポシ、八八年、三国友好登山隊にテレビ撮影隊員として参加。

隊員、アルブド・フックス（西独）三五歳、探険家、カナダ北部カヌー下り。

隊員、ミハエル・マラコフ（ソ連）医師、三五歳、モスクワの結核部門での助教授。一九八二年―八三年、南極探険と極夜期間の探険、一九八八年、ソ連、カナダ間のスキー横断探険で北極に到達。

隊員、グレアム・ジョイ（豪）三四歳、映画撮影を担当。

隊員、ダリル・ロバーツ（米）二三歳、アウトドア・スクール教師。

隊員、アンガス・コックネイ（加）三二歳、公務員。

北極探険隊事務局からの礼状

## 会務報告

### 二月理事会

二月十五日、午後六時四十分

場所　本会ルーム

**出席者**　今西会長、大塚、村木両副会

レクチャールームで、森氏を講師に、森林経済、動物の食害、野生動物の保護、などの話を聞く。五人で聞くには勿体ない、熱のこもった、実のある内容であった。

昼食後、雨着をつけ、傘をさして、二時間の観察山行をする。野生動物は見られなかったが、動物の足跡、休んだ跡、毛、食べた葉、木の実、などを説明して貰う。ケモノ道も、動物の大小、高さなどから、種類の違うことを知る。ぬかるみの急な下りに、鹿のすべった足跡が残っていたのはおかしかった。

二月初めに計画が決ったため、自然保護委員会、フィルム委員会にしか、知らせることができなかった。雨のため参加者も少なかった。来年度、勉強会、観察山行と二回に分けて、一般会員向けに実施したい、と参加者一同話し合った。

**参加者**　小山睦子、池田　剛、横山隆、黒沢秀雄、山口悠紀子

（山口悠紀子）

## 図書受入報告

図書委員会

**昭和 63 年 11 月分受入図書**

1. 田畑真一訳註「ウェストンの北岳」日本山書の会　昭和 63（著者寄贈）
2. 坂井光著「白山連峰と四高旅行部」山路の会　1988（古川脩氏寄贈）
3. 小谷隆一著「山岳名著100選展」小谷隆一　1988(著者寄贈)
4. 小坂町教育委員会編「小坂の三角点」小坂町教育委員会　1988（田立泰彦氏寄贈）
5. 足利武三・井上優著「家族ハイク・九州北部の山」西日本新聞社　1988（井上優氏寄贈）
6. 岡山大学山岳会ネパールヒマラヤ遠征隊編「トリプラ・ヒウンチュリ　1986」岡山大学山岳会　昭和 63（畑典之氏寄贈）
7. 富山山想会インドヒマラヤ登山隊編「スダルシャン・パルバット峰登頂」富山山想会　1988（版元寄贈）
8. 工藤父母道編著「滅びゆく森・ブナ」思索社　昭和 60（著者寄贈）

**12 月分受入図書**

1. 高橋由美子著「マンモスとの山旅」岳書房　1988（高橋文夫・由美子寄贈）
2. 畑正憲・C.W. ニコル著「森からの警告」CBS ソニー出版　1988（版元寄贈）
3. 太田晃介編「NANDA-KOT '87」立教山友会　昭和 63（立教大学山岳部寄贈）
4. 札幌山の会編「薄雪草」札幌山の会　昭和 53（版元寄贈）
5. 札幌山の会編「薄雪草Ⅱ」札幌山の会　昭和 63（版元寄贈）
6. ピーター・マシーセン著　芦沢高志訳「雪豹」めるくまーる　1988（版元寄贈）
7. 小野健著「砌海新道とその歴史」さわがに山岳会　昭和 63（著者寄贈）
8. 田中恭子編「Mt. Shiva 6,142 m」日本山岳会婦人懇談会　昭和 63（Mt. Shiva 登山隊寄贈）

長、鴫原、西村、太田、早坂、松永、岡沢、橋本、大森、田部井、大橋、織田沢、関塚、小林、新井、浜口各理事。小倉、平林、山野井各評議員。太田監事。

**委任**　松田評議員

**審議事項**

(1) 平成元年度収支予算案

(2) 未来ビジョン策定のための会員アンケート

**報告事項**

☆会報＝各委員会の行事報告はできるだけ提出するようにしてもらいたい。

☆山岳＝総索引編集作業始める。覚書を緑陰書房との間に近く交換する。

☆婦懇＝二度のスキー参加者各十四名、今井通子氏講演会三十一名。

☆フィルム＝一六ミリ約五〇本を点検、今年度中に目録を作成する。

☆図書＝雑誌製本準備中、三月十七日山岳史懇談会、四月八日山岳図書を語る夕べ、この一本展。

☆山日記＝終刊の報告を会報に載せケジメをつける。

☆指導＝三月二十五、二十六日山スキー講習会。

☆集会＝八方スキー参加者二十八名。

☆山研＝山研の改修を次年度（平成元年度）に検討し、二年度に計上したい。

☆学生部＝二月十二日クスム・カングル遠征隊出発。

☆高所＝四月六日シンポジウム「三国登山のタクティックスをふりかえる」。

☆総務＝三月十一日新入会員オリエンテーション。

（2月）

2日　フリートーキング（高橋通子）
7日　会報委員会
9日　学生部壮行会
14日　資料委員会
15日　理事会
16日　三水会
17日　図書委員会
21日　自然保護委員会
23日　フィルム委員会

2月来室者309名

**会員異動　2月**

物故

倭島　進（五五〇三）　88・4

片桐盛之助（一一二六）　89・2・11

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

## ⊙越後支部親睦登山会

知られざる山
未丈ケ岳へのお誘い

越後と会津を分ける秘峡只見川の源流近く、尾瀬中納言の伝説を残す銀山平の奥に、濃密な自然を湛えて鎮もる未丈ケ岳（一五五三㍍）を紹介致します。越後の山の典型ともいえる、素朴な魅力をご堪能ください。

**●日程**　六月十七日、午後五時までに銀山平の伝之助小屋（民宿）集合。上越線浦佐駅（新幹線）小出駅（在来線）

で、午後四時から車がお待ちします。夜は「登山と健康」と題して、長岡日赤病院長荒井奥弘氏（会員）の話と懇親会（新潟の地酒と旬の山菜が待っています）

十八日、未丈ヶ岳登山（実行動六時間、銀山平へ）着して解散（駅まで車で送ります）

●**参加費** 一〇〇〇〇円（火焔土器ほかの記念品贈呈）

●**申込み** 五月末日までに、〒九五一新潟市営所通一番町学生書房方 越後支部事務所☎〇二五―二二二―九八七〇番、または〒九四〇―一一 長岡市左近二丁目一一一番地 岩下光男☎〇二五八―三五―〇三四五へ。

お誘い合わせて多数のご参加をお願い致します。

☆

**越後支部**

## ⊙自然保護委員会の講演会

**講 師** 渡辺兵力氏

**日 時** 五月十一日（木）十八時三十分

**場 所** 日本山岳会ルーム

**テーマ** 自然保護考 ―環境論的自然観ノート―

**自然保護委員会**

## ⊙中国で岩登り競技会

様々な国の登山家達の経験を交換し、岩登りを促進し、友好を深めるために、岩登り招待競技会を約十ケ国或いは地域の参加のもと、北京において来る一九八九年九月十四日より二十日まで開催を計画しております。

要領は以下の通りであります。

一、競技会はUIAA（国際山岳連盟）の提案ならびに規約に出来得る限りのっとって行なわれる。

二、各国或いは各地域は、リーダー一名、コーチ一名、男女各二名ずつ、合計六名の選手団を送る。

三、中国登山協会は、各チームが中国に滞在中の宿泊費用を負担する。

四、岩登り用具は、各チームそれぞれが用意する。

貴山岳会がこの競技に参加されるなら、一九八九年三月末までに御返事をお願い致します。中国登山協会は、参加の確認と共に正式な招待状をお送り致します。

御返事をお待ち申しております。

一九八八年十一月二十九日

中国登山協会

**海外委員会**

**編集後記** だいぶ前のことだが、スイス山岳会のガイドブックを翻訳するとき、その一部が日本語訳され市販本に載っているのを知り、スイスに問合せたことがあった。許可がなければ出典を明記しても著作権侵害に当る場合ありとの返事だったように思う。

文化庁芸術課ではモラルの問題とも言っていた。個人の権利が尊重される欧米では当然とされるモラルなのだろうが、日本ではまだ低いというのがそのとき持った実感だった。

これまで個人の権利が国家権力で簡単に無視されることの多かった日本では、今もその残滓があるように思う。

リベラルであるはずのJACはどうか？「松方三郎の山と本」の集りで、ふっと思った。（岡沢）

平成元年四月二十日
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話 東京（261）四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六 赤坂グレースビル
印刷所 株式会社技報堂